

日本中が忘れてはならない日が一年間にいくつもあると思いますが、私は3月11日もその一つだと考えています。

14時36分、下校指導中のいきなりの停電、その数秒後、地面が突然湾曲したような揺れ、続いて、まだ校内に残っていた子どもたちの悲鳴。即座に周りにいた子どもたちと一緒に校庭に避難し、安全を確認して職員室へ。

あの日は横浜市全市校長会ということで、学校には校長はおらず、副校長と2人で対応を話し合い、子どもの安全、職員の勤務解除、下校在校の有無、…目まぐるしく動きながら、非常用のラジオだけが情報源でした。

校庭に集まった子どもたちを、ご家族が迎えに来て一人一人見送りながら、徐々に暮れてくる夕陽を見て、ほかの場所はどうなっているのだろう、家族は無事なのか、様々な思いが巡り巡っていました。日が暮れてひと段落ついたころ、校長先生が徒歩で学校に戻られ、これまでの対応や入ってきた情報を共有して、一時帰宅が許されました。

家に帰る途中、街灯は消え、信号は作動せず、多くの人が徒歩で家路に向かう様子を目の当たりにしました。その様子はまさに異様でした、異様としか私には映りませんでした。帰宅すると我が家は通電しており、テレビで被災地の様子を見ました。言葉を失いました。

家の中と家族の安全・安否を確認した後、家にあったお米で塩むすびをつくり、職場にとんぼ返りし、残っていた職員と交代しました。

今でも、すぐに思い出せます。記憶が曖昧になることもまだありません。それだけ、衝撃的だったということです。東日本大震災から10年、復興は進んできました。それでもまだ十分とは言えないのが現状です。「忘れてはいけない、風化させてはいけない」とメディアでは訴えています。忘れることはありません、10年程度で風化などありえないのです。この地にいた私ですらそうなのですから、被災地の皆さんのお気持ちは計り知れないものがあります。

